

Café des open

Menu 第25回

三浦一族の邸宅



三浦一族

文／谷合伸介（横須賀市立中央図書館 郷土資料室）

鎌倉時代、鎌倉には多くの御家人が邸宅を構えていました。しかし、全ての御家人が鎌倉に邸宅を持っていたわけではなく、自らの本拠地にしか無かった者もいれば、鎌倉に有していても、所用時の宿所として利用するだけの者もいました。常に鎌倉で暮らしていた御家人は、いわば鎌倉幕府の政治の中枢に関わる有力御家人であり、三浦一族はまさにこれにあたる存在でした。

三浦宗家の邸宅に関する史料は、まず『吾妻鏡』文治3年（1187）2月25日条にあり、この日、源頼朝は三浦義澄の邸宅を訪れ、酒宴を行いました。その際、同邸宅には、信濃国保科宿（現 長野市）の遊女の頭が寄宿しており、それは訴訟のためであったと記されています。訴訟により、寄宿していたという状況からみて、記事にある義澄邸は本拠地の三浦ではなく鎌倉とみられます。このように、文治3年という比較的早い段階で、義澄は鎌倉に邸宅を有していたとみられますが、その4年後の建久2年（1191）閏12月7日、新たな邸宅を構えます。義澄は、この新邸に頼朝を招いて歓待し、子の義村や景連（佐原義連の子）らが集められ、相撲が行われました。義澄の邸宅について、これ以上の詳細は分かりませんが、少なくとも義澄の代には、すでに三浦宗家は鎌倉に邸宅を構えていた様子が窺えます。

一方、義澄の子、義村の邸宅に関しては、より具体的なことが見えてきます。建保7年（1219）正月、鶴岡八幡宮で3代将軍源実朝が甥の公暁によって殺害されるという事件が起こります。この時、義村は執権北条義時の命により討手を差し向け、自身の邸宅に向かって公暁を討ち取ります。『吾妻鏡』によれば、公暁は鶴岡八幡宮後方の峰を登り義村邸に向かっていたと記されており、少なくとも義村邸は鶴岡八幡宮の近隣にあったことが読み取れます。そのうえで、貞応3年（1224）9月5日の『吾妻鏡』には、義村邸が火災に遭い、西御門の邸宅が焼失したと記されていることから、その場所は源氏3代が幕府をおいた大蔵御所の西側（現在の横浜国立大学付属小・中学校付近）に位置していたことがわかります。その後、邸宅は再建されたようですが、嘉禎4年（1238）正月、再び火災に遭います。ここで、注目し

たいのは、この時、火災に巻き込まれたのが、義村邸だけでなく、後藤基綱（御家人）や三浦泰村（義村の子）の邸宅も含まれていたと『吾妻鏡』に記されている点です。つまり、この時、義村と子の泰村は、近接するものの、別々に邸宅を構えており、その場所は西御門だったことがわかるのです。

では、その邸宅の敷地内は具体的にどのようなものだったのでしょうか。詳細は不明ですが、三浦宗家が滅亡することとなる宝治合戦直前の出来事の中で幾つか見

えてくる部分があります。宝治元年（1247）6月1日、執権北条時頼は、事前に武具を整えているとの情報を得ていた泰村邸に使者を送りました。泰村邸に赴いた使者は、武士の詰所に着座し、取り次ぎを頼みます。このことから、泰村邸にはそうした間が設けられていたことがわかります。さらに、時頼の使者は内部の様子を自らの郎従にも探らせ、「厩侍」（うまやさぶらい）に約120～130の鎧唐櫃（よろいからびつ）が集められているとの情報を得ます。「厩侍」は、厩におかれた下級武士の詰所を意味します。その後、しばらくして、この使者は泰村から「出居」（でい）に招かれます。「出居」は、邸宅の主人の居間兼客間を指すことから、こうした間取りも含まれていたとみられます。その後、宝治合戦が

勃発する6月5日の『吾妻鏡』には、一旦は時頼との和平案がまとまり、安堵する泰村に妻が湯漬けを差し出したという記事がみえます。食事を妻が用意している状況から、同邸宅内に炊事場があったことも窺えます。以上、『吾妻鏡』の記事を探ると、西御門の泰村邸には、少なくともこのような間が設けられていた可能性が考えられます。

ここまで西御門の義村邸及び泰村邸をみてきましたが、大蔵御所の反対側の東御門には、和田合戦以前、和田義盛の甥の胤長が邸宅を構えていました。このように、三浦一族は大蔵御所に近接する東西に邸宅を構え、鎌倉殿を支えていました。こうした点からも、幕府内における同一族の立場を窺うことができます。

参考文献：高橋慎一郎『中世鎌倉のまちづくり 災害・交通・境界』（吉川弘文館、2019年）

三浦一族の邸宅（概略図）



『新版 全譯 吾妻鏡 別巻』（新人物往来社、2011年）の「吾妻鏡鎌倉地図(2)」を参照し、『鎌倉市史 総説編』（鎌倉市、1959年）191頁の図を修正のうえ作成。